南樺太における硬質春播小麦「樺太2号」および「樺太3号」の育成について*

進 藤 省 三 (帯広畜産大学)

Breeding of "Karafuto No.2" and "Karafuto No.3" Varieties of the
Hard Spring Wheat in South Saghalien
Shozo SHINDO (Obihiro Zootechnical University)

緒 言 南樺太産の小麦はパン用小麦としてカナダ産に劣らない優秀な性質を有しているが、之については、1938年筆者が早熟性新品種「暁」を育成発表し、その原種の配付普及を図り、年々広く全島にその栽培を見るに到つた。然し暁は在来の奨励品種「樺在来1号」に比べて早熟かつ多収であるが、樺太南部、特に西海岸のやゝ温暖な地域にあつては、中熟性品種に比べてやや収量の劣る年があつたので、「暁」と同程度の早熟性を持つて、より多収な品種の育成に努力し、1943年人工交配試験により「小麦樺太1号」を育出発表した。更にその後同様の人工交配試験による後裔の中から「小麦樺太1号」に優る特質を持つ2系統の固定を見たので、樺太各地にその試作を行つた結果、いずれも試験所と同傾向の優良成績を挙げたので、1946年これらを「樺太2号」、「樺太3号」と命名し新優良品種に決定した。これにより樺太の小麦栽培はその安全性を強化しその栽培面積は更に急激な増加をなすものと期待されたのであるが、不幸終戦となりソ連治下に抑留せられた為之を発表する方法がなく、又その種実を持帰ることができなかつた為、その育成々績のみを残すことになりここにその育成経過の概要を発表する次第である。

育成経過 今「樺太2号」及び「樺太3号」の育成経過の概要を述べると、「樺太2号」は1934年の小麦優良品種査定試験において最も優秀な特性を示した数品種の中より、Italian Spring を母とし、Garnet Ottawa 452 を父として、1935年交配せられ、同年冬期間温室において直ちに雑種第1代養成を行い、翌年雑種第2代個体選抜に移り、年々系統選抜を重ね、1940年雑種第6代系統選抜を終えて「樺35号」の系統番号の下に1941年生産力検定予備試験を行い、更に翌年より生産力検定試験に進むと同時に地方委託試験を行い、樺太全島にその栽培適否を調査した結果、その特性は「暁」および「小麦樺太1号」よりも優秀であることを確知することが出来たので、1946年これを「樺太2号」と命名し、優良品種に決定した。又「樺太3号」は「樺太2号」より1年おくれて1936年 Italian Spring を母とし、Reward Ottawa 928 を父として交配し、同年冬期間温室においてF₁養成を行い、翌年より個体ならびに系統の選抜を重ね、1940年F₅系統選抜を終え、翌年「樺44号」の系統番号をもつて生産力検定予備試験にはいり、1942年生産力検定試験を行うと同時に全島各地に地方委託試験を行つた結果、その熟期、収量、品質において「暁」、「樺太1号」をりよりがする優秀な特質を示したので、1946年「樺太3号」と命名して南樺太における小麦の新優良品種に決定した。

試験成績 豊原市外小沼の樺太庁中央試験所農業部試験圃における1942年より1944年に至る3年間の生

第1表 生育特性調査

品種名	播種期 月日	出穂期 月日	成熟期 月日	生育 日数	成熟期における莖稈				穂			芒			赤銹病に 対する耐 病性
					草丈 cm	30cm 間茎数	細太	強弱	穂長 cm	粒着	色	稈毛	有	無	
暁	5.19	7.78	8.27	100	114.6	60	細	中	8.8	中	黄褐	なし	なし	なし	中
樺太2号	5.19	7.19	8.28	101	112.4	54	中	強	7.5	中	褐	なし	あり(中)	中	強
樺太3号	5.19	7.19	8.31	104	114.4	55	中	稍強	8.7	中	黄褐	あり	あり(少)	短	強

第2表 子実収量調査

品 種 名	反 当 收 量		ha 当 收 量			子 実				品 質
	子実容 量 石	比率%	子実重 量 kg	比率%	薬稈重 量 kg	1000粒 重量 g	1立重 量 g	粒 色	形 状	
暁	1.22	100.0	1654	100.0	2.370	28.4	747	赤 褐	中 長	稍良
樺太2号	1.46	119.7	2008	121.4	2.259	29.8	759	赤 褐	中 長	良
樺太3号	1.44	118.6	2014	121.8	2.398	38.2	770	赤 褐	稍長	良

* 昭和26年5月7日 第91回講演会に於て発表
日本作物学会紀事 第21巻 第2号

産力検定試験成績を当時の南樺太の奨励品種「曉」に比較して表示すれば、第1表、第2表の如くである。

特性 新品種の特性の概要を紹介すれば次の如くである。

樺太2号

- a 一般性状 茎秆は強靱で稍短く、穂長は稍短い。有芒種であるが芒の長さは余り長くない。
- b 出穂期、成熟期 出穂期成熟期ともに「曉」と差がなく極早熟性品種である。
- c 収量 年による豊凶差は少く収量多く反当1石4斗6升「曉」に比べて21.4%の増収を示し、「曉」と同じ生育日数でこの豊産性を示すことが「樺太2号」の特徴である。
- d 子実 粒形は母系の Italian Spring に似て長く、粒の大きさは「曉」より稍大きく、品質優良である
- e 耐害性 茎秆は強靱で倒伏のおそれが少く、赤銹病にも種々耐病性を持つている。

樺太3号

- a 一般性状 茎秆稍太く、父系の Reward Ottawa 928 と同様稈毛のあるのが特徴で、芒はあるが少くて短い。
- b 出穂期、成熟期 「曉」に比し4日晚いが早生種で樺太全島に栽培可能である。
- c 収量 平均収量は「曉」に比して21.8%増収を示し極めて多収である。(反当1石4斗4升)
- d 子実 粒形及び大きさは母系の Italian Spring に酷似して1000粒重量は38.2gもあり、1立重量も重く、その品質もパン用小麦として優れた特質を持ち、この子実の大粒良質が本種の特徴である。
- e 耐害性 茎秆は強く倒伏のおそれが少く、赤銹病に対して強い耐病性を持つている。

地方委託試験成績 宇遠泊、恵須取、敷香各支所の外全島8箇所の委託試験地において地方適否試験を行った結果、「樺太2号」「樺太3号」の生育日数、収量、品質は本所に於ける試験成績と同様にて「曉」に比し20~26%の増収を示し、敷香地方においても90日前後の生育日数を以て成熟期に入ることを確認し、全島に栽培可能な多収品種であることが立証せられた。

結 言 以上の試験成績により、「樺太2号」および「樺太3号」の2品種は樺太全島をその栽培適地とし特に極早熟多収性を持つ「樺太2号」は東海岸北部地帯に好適し、「樺太3号」はその試作成績において明かなように西海岸の稍温暖な地方に適応する品種と思われる。斯様に早熟、良質、多収の優良特質を持つ両品種は樺太は勿論、樺太とその気候土壌条件の類似した地帯、例えばシベリヤ、満洲、カナダ、北欧、北海道の根釧原野、天北高台地方においても必ずや良成績をあげ得るものと想像せられたが、前述の如くこれらの種実を持帰ることが出来なかつたことは筆者の最も痛惜に堪えないところであり、僅に南樺太に残されたこれらの原種が有意義に利用せられんことを祈る次第である。

終りに本育種試験開始当初より常に御懇篤なる御指導御鞭撻を賜つた故明峰正夫博士並に元中央試験所長三宅康治博士に対し深甚なる感謝の意を表すると共に、熱心に協力せられた元中央試験所技手藤井市三郎、嶋山鉦二両氏に対し、その労を謝するものである。

Summary. Two new varieties, "Karafuto No. 2" and "Karafuto No. 3" of the hard spring wheat were bred at the Central Experiment Station in South Saghalien. "Karafuto No. 2" was produced from a varietal cross, in 1935, of Italian Spring × Garnet Ottawa 452 by S. SHINDO and "Karafuto No. 3" from a varietal cross, in 1936, of Italian Spring × Reward Ottawa 928 by the same breeder.

"Karafuto No. 2" averaged to be about 20 percent more productive than the Garnet Variety in South Saghalien and proved to be best for cultivation in its north eastern region.

"Karafuto No. 3" equalled in its yield to the former and was characterized by its especially large grains (38.2g per 1,000 grains). This variety matured, however, about 3 days later on the average than "Karafuto No. 2", and was recommended to cultivate in the warmer south western region of South Saghalien.

It is very regrettable that neither of these new promising varieties had a chance of being introduced into Japan.